



- ・進んで学ぶ生徒(知)
- ・心豊かな生徒(徳)
- ・たくましい生徒(体)

### 品格について 校長室より

私は、この歳になって、この職についてもまだ自分に品があるとは、言い難いと思っています。子どものころから菓子の小売り商売人の家の3人兄弟の末っ子として生まれ、育ちました。品のある言葉遣いや立ち振る舞いのできる人をよく、「育ちのいい人だね」とか「品のいい人だね」「家柄が違うね」などと言われます。ある意味、「品格」は、家柄だというのは、真実かもしれません。私は、このような家柄に育っていませんので、品格などまったくわかりませんでした。ある本の中に確かに家柄のいい方は、幼いころから作法や所作、人への接し方を教えられて育つので、それがあたりまえとして、育つとありました。私とえば、商売人の家ですから、食事なども家族そろってと言うことなどなく、従業員も含め仕事の合間にそれぞれが順番に食べていました。サザエさんの家のような食事では、なかったのです。

母に聞いてびっくりしたのは、私がハイハイをしだした時、危ないので多くの人の目につく店の端に段ボールを置き、その中に入れられ、赤ちゃん時代を過ごしたことがあったようです。嘘のような話ですが、その時の白黒の写真が出てきて、その中の大きな赤ちゃんが段ボールの中で笑顔で丸いせんべいを持っているシーンを見た時は、嘘じゃないんだ。と実感しました。

しかし、人として生まれた以上、より良い人間関係や将来に役に立つようにと考え、少しは、品の良さを身につけたいと思い、事あるごとに色々なことも学びました。ここでは、私の知らなかったことをいくつか紹介しますので皆さんも、これからの中学校生活でも役に立てくれれば幸いです。

では、そもそも品格とは、「何か」と調べてみると、私が一番近い考えだと思ったのは、「品格」は、「家柄」や「作法」でなく「人としての在り方」を身に着けることだということです。今風にいうと「ソーシャルスキル」「マナー」「ルール」と言ったところが近いのではないのでしょうか。作法や所作の方の裏には、必ず相手や周囲を思いやる美意識があります。実は、正直にいうと私は、この作法とかしきたりが、大の苦手です。「私は、作法に自信があるの」などと言われると「正直、好きになれないな」と感じてしまいます。作法やしきたりがあったとしても1番の目的は、相手とよいコミュニケーションが取れることです。作法やしきたりは、そのための一つの基準にすぎません。作法やしきたりがあったとしても、相手の方に不快な思いをさせないことを優先するべきです。

では、まずこの1例について紹介します。伝統と格式を重んじるイギリスで、ある国の重要な来賓をお招きし、晩餐会(豪華な夕食でもてなす会)で開催した時のことです。その来賓の方が何か勘違いしたのか、フィンガーボール(食事中に少し、指を洗うためにボールに水が入っている)の水を飲んでしまったのです。するとそれを見ていた故エリザベス女王は、そっと微笑み今度は、自分も自分のフィンガーボールの水を飲みましたそうです。なんと思いやりのある行動でしょう。そして、なんと本質をわきまえた柔軟な対応でしょう。その品格は、本物だと思うのです。凡人には、できないことです。

日本の神事で最も大切なのは、天皇が神様の共食する「大嘗祭」の儀式です。一般に祭りや儀式の終了後に行われる神様と共食を「直会」といって、共に何を食べるの

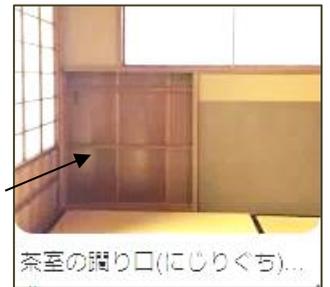


0歳児向けダンボールの室内遊び。



かも大切ですが、一緒に食べることを大切にしてきました。ですから楽しく食べるために相手に不快な思いをさせないように、できたのが食事の作法です。その他にも嫌われる食事の例をあげると動物が頭を下げて食べる姿を連想させる食器を下に置いたまま食べる「犬食い」、口に食べ物を多く含みおしゃべりをしたり、物を大きな音をたてて食べるなどがあります。どれも他人に不快な思いをさせるからです。私が母から教わったのは、箸の持ち方と包丁の使い方だけでした。正式なお椀の持ち方や洋食でのフォークとナイフなどのマナーは、いまだに心配で人に迷惑をかけないようにと気を遣うので疲れます。(ですから、できるだけ行かないようにしています。) 又、学校給食は、日本の優れた制度ですが、はし・スプーン・食器などの制約があり、作法を学ぶには、難しいところがあります。ですから、それ以外では、品格の本質をもとに他人に迷惑をかけないようににしたいものです。

最後は、<sup>けっかい</sup>結界の例についてお伝えします。「結界」は、あちら側でもこちら側でもない曖昧で不安定な場とされ、昔から人々に危ういものとして恐れられ侵してはならないとされました。例えば、茶室への入り口(にじり口)は、聖なる茶室と日常空間とを分ける結界です。そこを通ることで、中へは、身分の違いや日常を持ち込まず、茶室の中では、平等としました。商売をしているお店も暖簾を下げることで道路(往来)と店を区切りました。一枚の布やすだれ・屏風ふすま・障子・つい立・縁側・扇子等が空間を区切る結界だそうです。このようなことが前提になって日本の家屋が建てられているのが良くわかってきます。日本が厳しい結界を守ってきた中で、精神においても結界を作り、自分や他人を守る考え方が根付いたのだそうです。したがって精神的なものも含んで結界を越えることを下品ととされたのです。反対に下品な対応をする失礼な相手には、毅然とした態度で応じる、それは、相手にも結界を越えさせない大切な作法です。



茶室の入り口(にじりくち)...

品格は、生まれながらに備わっている遺伝子では、ありません。品格の根幹を知り、誰にでもその気になりさえすれば、自分で手に入れられるのです。学ぶべきことを、やるべきことを精一杯やった上で変化や結果を受け入れるのが一番良いと思います。その中で下品な虚栄心や結果のみからしか自分を認められないことから脱却してほしいのです。何事においても成果を求めるならば、むしろプロセス(見えない過程)を重んじることを大切にすべきと考えます。結果を出しつづけてきた人を「プロ」と言いますが、それは、品格をもってプロセスを大切に踏み続けてきた人のことだと、「プロ」は、みんな知っています。



## 校長見聞録

先日、ある機関誌を見ていたら、生きることのつらさを表す言葉として、四苦について述べられていた。四苦とは、**生きること・老いること・病にかかると・死ぬことあり**、そこに人生に立ち現れる4つの苦が加わると八苦になる。**愛別離苦**：愛しているものと別

れる苦しみ、**求不得苦**：求めても得られない苦しみ、**五蘊盛苦**：現世界で止めどもなく沸き起こる煩惱による苦しみ、**怨憎会苦**：いやなもの嫌いなものと出逢う苦しみ、と言うのだそうだ。諸先輩方には、はなはだ恥ずかしいが65年間の自分の人生を少し振り返ってみただけでも、いいことばかりあったことではないのは、容易に思い浮かぶ。同僚の校長には、大変なことに好きで望んでると揶揄されたこともある。正に毎日、四苦八苦であり、日々様々なことが起こる。しかし、私は、少なくとも今は、幸せである。やることも、やるべきことも毎日のように湧いてくる。私にとって極めて不都合でありがたくない経験の数々である。しかし、わたしの師は、その様な逆境や不安に臆することなく、自分が信じた生き方ができる



ことが心からの満足が得られることなのだと言った。私のような者の人生でもそんな時、輝かせてくれると感じるからだ。本当に大切にしたいことは、何にか。大切にしたい事のために、今できることは、何か。その問いの繰り返し退屈に思えがちな毎日の人生を楽しく彩ると教えていただいた。感謝。

